

序

X線診断では、ときどき「読影のコツ」ということばにお目にかかることがあります。X線写真の読影には、なにか名人芸的な勘のようなものが必要だという先入感があるのかも知れません。X線診断の修練では、このような意味の「コツ」を期待する気持が残っているとしたら、むしろそれを取り除くところから始めるべきであると考えています。

X線診断で、読影という作業を合理的に客観的に進めていくのに、必要な基礎が2つあります。第1は、種々のX線撮影やCTなどで、画像がどのようにつくられるかについて、基礎的に十分な理解をもっていることです。第2には、画像に対応するもととなる正常のX線解剖、および種々の病変で起こる形態の変化についての局所解剖学的な正確な知識をもつことです。この2つから、どの症例についても常に、再現性のある、一定の確からしさをもった判断が、いつでも同じように進められるようにするところに、X線診断の基本的姿勢があります。

X線診断やX線写真の読影には、ある人の独特の方法があって、その人だけしかできないとか、伝授を必要とするコツがあるというようなものであってはいけないと思っています。古いX線診断にはそんなイメージがないでもなかったようです。なんとなく陰影がきかないとか、乱れているなどという印象的な判断から、病変の性質を直感的に断定するのが専門家であると考えるような臭いが、今でも残っていないとはいえません。このような意味の読影のコツはいろいろなことを、新らしく誕生したCTであらためて示すことに、この特集の目標をおいています。

(田 坂 晴)